

チートと大罪を与えられた者の幻想入り

P（紅刃）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはチートと大罪を持たされた者の幻想入りである。

突然幻想入りさせられた男 麗矢は花畑目で目をさます。

これから麗矢にはどんなものが待ち受けているのか!?

それは麗矢にとってなにをもたらすのか!?

チートと大罪を持たされた者の幻想入り開幕!

目次

気がつけば花畑

1

気がつけば花畑

彼はある世界に迷い込んでいた。その世界についてはまあ、おいおいわかるだろう。彼は今その世界の花畑にいた。

「ねえ貴女その花…その私の花、折ったのでしよう？」

目の前にいる羽の生えた生き物に対してそう言い放った彼女は羽の生えた生き物から見れば悪魔のような顔をしていた。

「え…あ…(…)(…)」

「話すことも出来ないの？小さな妖精さん。」

ニタアつと笑う彼女を見て小さな妖精はと言われた生き物はなにも言えなかった。それをたまたま見ていた彼は…

「俺はそこの妖精？が花を摘む…折ったところから見えていたがおそらく悪意があつて折ったわけじゃないとないと思うが？」

「貴方が誰なのかは知らないけどそこの妖精が私の花を折ったのは確かでしょ？だからその罰を受けて貰わないと。」

「花の種を買って来いとか花の手入れをしろとかそんな易しい罰…ではなさそうだな。」

彼女が言う罰はそんな生易しいものではないと彼にはなんとなく分かった。

「そうね。折ってしまつた花のようになって貰わないと。」

「なるほど。花のように……つまりあれか下半身を切り離しそのまま苦しんで死ね……趣味が悪いようで。」

「それも悪くないけど私はそこまで酷じやないわ。下半身を切り離したら直ぐに死んでもうわ。」

「……ごめんなさい！」

それは妖精にとって必死に振り絞つて出した言葉だつたのだ。

「謝つても花は元に戻らないわ。」

「あ……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

妖精にとつて彼女言葉は絶望でしかなかつた。

「ふん、ならかわりに俺がその罰を受けてやるよ」

「はあ?」「えつ?」

彼女と妖精は呆気にとれたたような顔していた。そりや驚くだろう全く知らない男がいきなりあつて数分の名前も知らない妖精の代わりに「自分」の下半身……つまり腰から下を切り離すと言っているのだ。驚かないはずがない。

「なあやるなら早くしろよ」

「そんな見ず知らずの妖精のために自分の身体を捨てるなんて貴方は頭がおかしいのね。」

「よく言われるさ。」

「面白いわね貴方。本当なら花を折った理由によつて罰を受けて貰うか考え直すつもりだったけど……いいわその望み叶えてあげる。」

切られる瞬間は一瞬で彼女の手により彼は息をしなくなつた。妖精はなぜ彼女は「望み」と言つたのか？なぜ彼は自分の代わりに命を捨てたのか？という疑問があつた。そして何より彼を殺してしまつたという罪悪感があつた。

「あ……」

言葉が出なかつた。涙が出た。なぜだろう？全く知らない人なのに、思い入れもなにもない人なのに……いや逆だ全く知らないからこそ自分は自分の弱さのせいで赤の他人を巻き込み結果殺してしまつた。

(なぜ彼は殺される事を望んだのかしら?)

妖精は自分の弱さを悔やんだ。彼女は考えた。そんな数秒の沈黙の時間を破つたのは

「ごりや、確かにチートだな。」

「え？」「あ、え？」

さつきまで死んでいたはずの彼だった。彼は生きていた。いや、違う生き返ったという方が正しいだろう。死人としてではなく生身の人間としてだ。

「ねえ？ 貴方どうやって生き返ったの？」

「え？ ああそれは… いやその前に妖精は開放でいいんだな？」

妖精は決めた強くなる、と。この人の弟子になろう。なれないならばこの人を観察しよう。自分の身くらい自分で守れるようになる。他人に迷惑はかけないと。

「ええそうね。罰はしないわ。」

「ならいい。それで確か俺が生き返った理由だなそれは俺はチートという能力を持たされたからだ。」

「チート？」

「この世界にはチートという言葉はないのか。そうだな簡単に言うとならバランスを壊すような強さって事だ。」

「なるほど。だから生き返ったのね。」

この世界は能力が強い人なんていっぱいいる。だが彼の強さは異常なんだろう。そう察する事が出来た。

「俺もこの能力のことはイマイチわからんが。あつそれともう一つある。それは七つの大罪だ。」

七つの大罪というのはよく分からないが言葉から察するに一人の女性と一匹の妖精は恐ろしいものだと感じた。